

# 小池辰雄記念図書室だより

2016. 2. 25(木) NO.29

千葉県市若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

## 1. 各地の読書会

余市恵泉塾 長野 初美

### 「お二人の魅力的な関係」

余市では『無者キリスト』第三部の第五章「宗教と文化」を学んでいる。

「宗教が文化を生む」。例えば、恵泉塾の価値観で生活する人々が集まって柔らかい愛の空気を生んでいるとすれば、それは文化だという。小池辰雄先生は「文化の土台としてその源泉であるような、または道徳の根源であるような宗教」を問題とされた。文化が生まれる根っこに宗教がある。まさに恵泉塾だ。小池先生も恵泉塾のような信仰共同体を思い描いておられたのではないだろうか。数年前、初めて恵泉塾を訪れた小池信雄さんの感想は、「父に見せてあげたかった」の一言に尽きるという。

それにしても、一般教会の生むキリスト教文化と恵泉塾のキリスト教文化は違っている。異なる者、敵対する者が愛し合う文化など、世にも、教会にも、珍しいのではないか。弱い者が助け合って暮らす生活の表現、喜びの表現が、他では絶対生まれない空気を生んでおり、信州小諸の石垣会がそのモデルだという。

空気と言ひ、スピリットと言ひ、この目に見えないものが実は文化であったか、と今回の読書会で知った。文泉書院はそれを文字化、意識化して『波止場便り』という冊子を生み出している。これは私たちの群れの生活に表現を与える仕事だ、と先生が仰った。へえ、そうだったのかと驚く。だから文泉書院があることは大切だ、とその存在意義を伝えられて身の引き締まる思いがした。

1980年代に水谷先生に誘われて行った京都集会で、小池先生の講話を拝聴しながら私が印象的だったのは「キリスト道」という言葉だった。「普通はキリスト教と言っているが、イエスは自分のことを『私は道だ、真理だ、命だ』と言った。それで私はキリスト道と申している」と本文中に書かれてあった。後年、私はこのヨハネの言葉と衝撃の出会いをして初めて目が開いた。「生き方が変わらなければ信じた甲斐がないよ。知識や理屈じゃないんだ」と教えられる朝ごとの聖書の学び。恵泉塾生活はその学びの反映だ。そこから独自の価値観が生み出されて文化になる。今の世にはびこっている神を無視した文化に抗って 20年、もしこれが 100年続いたら本物だ！と水谷先生は熱っぽく語られた。小池テキストを自在に操りながら生き生きと真理を説き明かされる先生を見て、私はいつまでも色褪せないお二人の魅力的な関係を見る。永遠の神、主に感謝！

## 発売予告

### 小池辰雄・水谷幹夫 往復書簡集

小池家と水谷家に保管されていた、  
小池辰雄先生と水谷幹夫先生の  
間で交わされた往復書簡を  
刊行予定です！

## 小池辰雄を読む会

### ●余市

2016年3月6日(日) 13:30~15:00  
2016年4月29日(日) 13:30~15:00  
余市郡余市町豊丘町 370-9 恵泉祈りの家  
\*会費:無料(自由献金)  
\*連絡先:0135-23-9222(木下)

### ●札幌

2016年3月5日(土) 13:30~16:00  
2016年4月28日(土) 13:30~16:00  
札幌市南区川沿 10条 3-10-5 札幌祈りの家  
\*会費:無料(自由献金)  
\*連絡先:011-571-2348(浅井)

### ●都賀

2016年3月19日(土) 10:00~12:00  
2016年4月23日(土) 10:00~12:00  
千葉県市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5階  
\*会費:1000円  
\*連絡先:043-235-3815(石丸)  
\*準備のため、出席のご連絡をお願いします。  
\*予習不要・初心者歓迎

### ●関西

2016年3月13日(日) 13:30~15:30  
神戸市中央区磯上通り 4-1-12 神戸バイブルハウス  
\*会費:500円(自由献金あり)  
\*連絡先:090-4645-7389(後地)

本図書室は献金で運営されています  
図書室便りは隔月発行です

### 砂漠はサフランの如く

「その実存をもて『小さき群に』福音を証示してくださった 天の藤井武先生に この創刊号を ささぐ」。

扉に、こう書かれた『曠野の愛』誌・第1号。1951年1月(47歳)であった。

藤井武先生の晩年(1930年)、『舊約と新約』誌の包装のお手伝いをしたある夕暮れのこと、先生が微笑をたたえながら、「小池君はそのうちに、…しい雑誌を出すだろう」と言われたことを思い出す。それから20年あまり「…しい」とは異なり、かかるみばえのしないのが現れた。「弟子はその師に勝らず」。ただしかし、私らしいものであれば足れりとしよう。

上は、この雑誌の最終ページ「無限軌道」からの引用だが、そこに、彼はこうも記している。

「1950年のクリスマスの頃、プリント誌を書くように、何ものかに迫られた。幕屋でたっぷり一年間、第二イザヤ書を講じたので、これを主題とし、配するに詩篇及び黙示録を以てせんとした。ところが急に神様から変更命令がくだった。つい3、4日前、参議院聖書交誼会で語った『三位一体の神』を書け、というのであった。筆を執って一気呵成。講演とはまた趣のちがったものにはなつたが、これが摂理であったことを感謝する」と。(\*)

神の三位一体(父なる神、子なるイエス・キリスト、聖霊)に我らが参与して、父、子、聖霊、罪人のこの我、という四位一体になった。十字架の四端がこれを表わす。この四位一体、その中心としてキリストと我との一体が、信仰を持って告白されるまでは、三位一体の神はつかめない。実存的三位一体は、聖霊の事態を体験する者にのみ開示される世界である、と彼は断言している。

16ページのガリ版月刊誌に、誌代¥20の判が押してある。第3号の末尾には「創刊号・第2号共に品切れ」とあるので、滑り出しは好調だった模様だ。

1951年の辰雄には、矢内原忠雄と編さんする

『藤井武選集』(全九巻)の大仕事があり、東北伝道もあり、東奔西走だったようだ。自分の雑誌編集など時間のやりくりには、さぞかし夜なべ仕事が続いたことだろう。

さて、『曠野の愛』誌・第2号の主題は「神の榮光」。イザヤ書第35章である。

偉大なる無名の人といわれる第二イザヤの麗筆による終末的希望の詩だ。この35章の私訳(ヘブライ語から訳す)と、12ページにわたる註・解説を、「おのが十字架を負う不具の人々に、不治の病者に、ささげる」としている。

自分のことを「詩人」と言った辰雄。全聖書中で最も美しい詩。辰雄特愛の詩の1節はこうである。

一. 曠野と渴ける地とは楽しめよ!

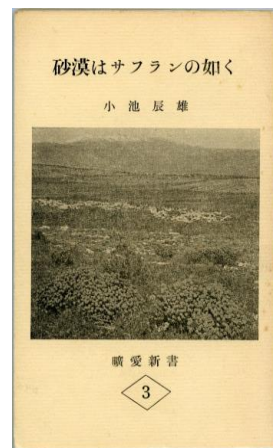
砂漠は歎びてサフランの如く花咲けよ!

五. その時しも、<sup>めしい</sup>盲者の目はひらけ、

<sup>みみしい</sup>聾者の耳はあくべし。

この傑作は、『砂漠はサフランの如く』という美しいタイトルとなって、1965年に発行する「曠愛新書(3)」に収められることになる。

(\*) 論説「三位一体」は、『無の神学』(小池辰雄著作集 第三巻)の中に入っている。



曠野の愛社  
(1965年5月15日発行)  
絶版

